
異空戦記レイゼファー

赤井夕陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異空戦記レイゼファ―

【Nコード】

N5648M

【作者名】

赤井夕陽

【あらすじ】

実社会から距離を置いた：『引きこもり型ニート』である

七海透也 22歳無職

彼は、ひよんな事から甥っ子を預かることになり

それから、異世界から来た巨大ロボットや戦闘機に乗った女子高生に遭遇

ほどなくして、彼の人生を大きく動かす物語に巻き込まれていく…
ロボットあり、魔法あり、ラブコメありの全ジャンル対応巨編が今
始まる。

Prologue

7月の空は清々しいほどに澄んでいた
カーテンの隙間から日光が差し込み、窓から見える街路樹から蝉の
音色が響き渡る

いよいよ夏本番がやってくるのだと否応なしに感じさせる温度

四畳半の部屋の片隅に置かれたベッドに半分足を投げ飛ばしながら、
俯せに男は眠っている

太過ぎず、細過ぎない中肉中背の体格と何ヶ月も散髪をしていない
と容易に推測できるボサボサの黒髪

オーディオラックの上には、つけっぱなしのテレビが置かれて、泥
沼の恋愛模様を描いた…

俗に言う「昼ドラ」を誰も見てないが、静かに映し出していた

男の部屋は、都内から少し離れた住宅街の一戸建ての家の2階に『
門を構えている』

門を構えている、というのは間違った言い回しではない
部屋にはベッドをはじめ、テレビ、小型冷蔵庫、簡易コンロ、そし
て「パソコン」がある

生きていくのになんら不便はないが、それ以上に彼の生活内容が「
門を構えている」という意味合いを強くさせていた

彼は、日中は死んだように眠っている

夕方頃に起き出して、下の冷蔵庫もしくは徒歩2分で行ける向かい

のコンビニまで食料を調達

その後、テレビを流しながら読書に没頭するか、机に置かれたパソコンを起動して、ネットの波に揺られる

そして睡魔が襲えば、決まった時間もなくなつた死んだようにベッドに横たわる

コンピュータ関係の専門学校を卒業し、職も就かず約2年もこんな生活が続いている

「ニート」や「引きこもり」と言う言葉の意味のままに人生を送る彼の名は

七海 透也

齢22で社会から外れた生活を送る不健康な青年である

ちょうど時計の短針が「2」を指した頃、トン・トンつと階段を登る音が透也の部屋（厳密には、家）に近づく

部屋の前で足音が一旦止まり、一拍置いて部屋を仕切る襖（これもまた厳密には玄関）が勢いよく開く

透也はまだ俯せのまま寝ている

まだ昼の2時過ぎの時間帯は、彼にとって熟睡の最中であるからそう易々と目は覚めない

「もう……。テレビつけっぱなし！」

ちょうど、昼ドラから通販番組に変わったテレビに、華奢な腕を伸ばして主電源を落とす

手をテレビから離すと、手慣れた動作でテレビの後ろにある、部屋にしては少し大きめの窓、そこに付けられた「開かずの」カーテンをこれもまた勢いよく開く

梅雨も明けて、さんさん 燦燦と輝く夏の日差しが、鬱陶しいほど対照的な部屋に入り込み、部屋自体が深呼吸するようにジメジメした空気を外に吐き出す

「これでよしと…透也、生存確認。」

美しい、それでいてどこか力強さも感じさせる女性の声が、その声に不釣り合いな場所に響く
透也はまだ俯せのまま横たわっている

「ほらほら、いい加減に実社会に戻ってきなさい。」

すらりと長く細く、透き通るような白い足が、丈もほとんどない短パンのせいもあって強調される

その足は、ただいま透也の頭の上に置かれている…否、めりこんでいるといった表現が正しい

「姉ちゃん。いつ帰って来たの。」

透也の第一声は、ベッドに顔を沈めたまま放たれた

相手の顔を見ようにも後頭部から圧力がかかって振り向けないのだから、致し方ない

「今日の朝よ。母さんに透也がちゃんと生きてるか調べてくれってま、用事はそれだけじゃないんだけど。」

透也の姉、沙夜子は結婚後、実家の東京から離れて京都に夫と二人で暮らしている

わざわざ京都から来たのだから、透也の様子見だけに東京まで、しかも朝早くから来るはずはない

何の用事があるのだろうか、まだベッドとヘッドが一体化している透也は考えなかった

今はまだ本能にしたがい、瞼を閉じて意識を現実から遠ざけていく

「ここらこら、せっかく美人な姉が遠い所から起こしにきてあげてるんだから、起きなさい。」

透也の後頭部から圧力が無くなり、頭がふわつと軽くなる

沙夜子は弟の頭に乗せていた足をどかせて、クーラーのリモコンを手に取り電源を切る

ほとんど、休みなしで動いていたクーラーは熱を帯ながら不快感を上げていたが

役目を終えたように静かに口を閉じていく

「暑い。」

透也のささいな反抗はこの一言に集約されて放たれたが、言葉の受取人は踵を返して階段を降りていった

「ご飯作ったから下に降りてきてね。」と言い残して

やれやれ、と身体を起こす

クーラーで直接冷やしていた身体は、凄く重い…

しかし、『この部屋から出る』という意識の方が、さらに身体の重量を増やしていることを彼は知っているが、それについての思考はやめた

姉に逆らうことは出来ないと、幼少時代の経験からの判断を下したからだ

階段を降りて、

リビングの隣に置かれた食卓へ向かう

卵焼き、豚肉の生姜焼き、味噌汁が机に並べられていた

ゴクリ、と透也の喉が鳴る

最近口になっているご飯といえば、コンビニの出来合いや母がラップをして置いている冷たいもの

電子レンジで温めているから、物理的な冷たさは感じないのだが、それでも味はやはり『冷たい』

それに比べて、目の前に置かれた料理達は、豪華とは言い難い質素なメンバーだけど

湯気の登る作り立てのそれらは、視覚だけでも彼の舌を頷かせる

視覚からの刺激に耐えられなくなった透也は、急ぐように椅子を引いて腰深く座り込み、箸を持って合掌

まずは、生姜焼きから堪能しようと掴んだ所で

彼は、異変に気付く

その異変は、彼にとって受け入れ難いものだったらしく

箸から味付けされた豚肉が滑り落ちていき

生姜と豚肉の見事なハーモニーを今かと待ち構えるように開いた口は、閉じることを忘れている

食卓に置かれた料理達に意識を取られすぎて、透也は彼の向かいに座る存在に気づかなかった

その存在を確かめるように、彼とその間にあるお茶ポットを静か

に左へ滑らせる

彼の向かいに座るそれは、お茶ポットの移動に合わせて右からひよこと顔を出して、透也に眩しいほどの満面の笑みを向ける

「誰だ、お前は。」

向かいに座る隣人の笑みを透也はこの言葉で返す

それを聞いた、沙夜子はすかさず隣のダイニングキッチンから飛び出して、透也の頭頂部に手刀をいれる

まともに喰らって悶絶する透也を見て、言葉にならない言葉を発しながら笑いを上げ、足をばたつかせる…赤ちゃん

「私の息子！ねえ？達也くうん。」

座っていた、というより椅子に取り付けていたベビーシートに『座らされていた』赤ちゃん…改めて達也を抱き上げながら、沙夜子は声の音色を変えてそう告げる

透也はすかさず、両手で頭を抱える

自分の殻に閉じこもっていた所為で、姉の出産を知らなかったことに対して、苦しんでいる…のではない、決して

何故、姉がわざわざ京都からしかも、朝早くから実家に帰ってきた理由が分かりはじめたからである

目の前に沙夜子が腕を机に預けて前のめりに、透也の向かいに座っていた

長い黒髪をアップで団子状に止めている

もみあげとうなじは白い肌を引き立てながら艶やかさを増す

沙夜子は、この辺では少し…というかなり有名な美少女として知られていた

透也と歳は一つ違いで、高校も違う所へ通っていたのだが

それでも、嫌というほど、姉に好意を寄せる男達の噂が、透也の耳に入ってきた

酷いときには、姉に近付きたいが為に弟である透也と仲良くなろうという輩もたくさんいた

そんな美少女だった姉が、結婚して子供も産んで、衰えることを知らずさらに輝きを増して「絶世の美女」となって目の前に座っている

まるで透也の人生で貰えるはずの正エネルギーが、彼女の所に行っ

ているかと錯覚させられるほど

それほど、負のエネルギーに囲まれている透也と不釣り合いなほど、沙夜子は輝いていた

「透也にお願いがあるんだけど…。」

「断る。」

姉の言うことには、逆らえない、がさすがにこれだけは断らないといけない気がした

用件を聞くまでもなく

「まだ用件を言っていないんだけど。」

「彼の姿と荷物の量から推測するに容易に用件は分かる。」

と透也は達也を指指し答える

「じゃあ話は、早い！達也を3日間預かって。」

「身内とは言え、俺に赤ちゃんを預けるなんぞ正気の沙汰とは思えない。」

「透也しかいないの。お母さん仕事休めないし…ね？ベビーシッター・トウヤ！」

沙夜子は今日の夜から3日間、急用の仕事で沖縄に行かなければならない

お義兄さんは相変わらず海外出張で家を空けているらしいし

母さんも仕事が忙しくて休みを取れず

身内で一番暇な透也に白羽の矢が立ったわけである

否応なしに預かることを了承している前提に、沙夜子は話を進めていく

オムツの取り替えだのミルクの作り方だの、ゲップのさせ方まで丁寧に透也にレクチャーする

その姿はもう立派な母親の姿だった

一通りレクチャーを終えると、時間はもう空港に向かう時間になっていた

せっせと、弟の目の前でタンクトップと短パンを脱いでスーツに着替え

化粧はある程度していたので、コンパクトを見ながら軽く直して準備を整える

「何かわからないことはある？ 私電話にほとんど出れないかも知れないから今の内に聞いて。」

ハイヒールを履きながら、沙夜子は透也に問う

「ああ、今までの流れが全て解らない。」

細い腕が透也の腹部に突き刺さり、彼のボディに鈍痛が走る

しかし、倒れようにも彼の腕には赤ん坊がいるので何とか踏ん張って耐えた

沙夜子は、達也を抱き抱えて額にキスをする

「ママはすぐに帰ってくるから、透もおじちゃんと良い子に待ってね。」

二度三度、キスをして透也に再び預けた

「じゃあ行ってくるね。わからないことがあれば、母さんに聞きなさい。それが嫌なら『お友達』で調べなさい。」

手を振りながら、玄関から出ていく

『お友達』とは、パソコンのことであり、そんな皮肉も言い返す言葉がない透也は、抱き抱える達也の顔を見てため息を一つ漏らす

「そうそう。言い忘れてたけど、自分の部屋に閉じこもるのは辞めなさい。透也が純情なのは、この美人な姉がよくわかってるから、あの娘の事は忘れて、次の恋を探しなさい。…まあこの話は帰ってからゆっくりね。では、行つて参る！」

急に玄関扉を開けて戻ってきたと思ったら、お別れの台詞にしては詰め込み過ぎて今ひとつ、理解に苦しんだが、沙夜子の勢いに任されるまま、後ろ姿を見送った

第一話【不慣れな、baby-sitter】

目を輝かせているのは、達也と呼ばれる未確認生物

まだ泣いたりわめいたりしてないが、些細なことでも一度、混乱を招けば手に負えない

そうになると母にしか頼れないのだが…どっちみち、つきつきりで世話は出来ない

どんな展開になろうが、『母に子守を頼まなければならない』

この事が透也を悩ませた

- - もう2年もろくに顔を合わせていない

別に嫌いとかそういう拒絶意識はない

単に苦手なのだ

それは俺が勝手に一方的な思い込みかも知れない

22歳にもなって散々迷惑かけて、何にも解決できてないまま、今日顔を合わせる…はずだ

！ - 怒られるだろうか？

- 何事もなかったように振る舞ってくれるのだろうか？

- それとも軽蔑と卑下の眼差しで俺を見るだろうか…

少し考えていたら、達也が遊んでいたボールを口に頬張る

「おいおい…口にいれるのは駄目だって言ってるだろ？」

唾液だらけのボールをつまみ出し、やれやれと透也はため息をついた
ボールを返して貰おうと透也の指にしゃぶりつく達也

一体全体、何故こんなことになってしまったのだろうか

目の前にいるのは、純白の心と無限の可能性を秘めた…
透也自身とは真逆の位置にいる存在

その輝かしさ故に目を背けなくなる

『羨ましい』と透也は単純に思った

その無限に広がる可能性が特に

- 出来るなら、俺も過去に戻ってやり直したい…。

そんな叶いもしない野暮な願いについて、思考を巡らせていた

前略

姉上様、如何お過ごしでございますか

もうかれこれ、姉上様が南国の空へ飛び立って4時間が経った頃でしょうか？

やはり、私にはベビーシッターなぞという高度な技術を要する職業は、向いておりません

部屋に閉じこもって、無になり、極限まで忍耐力を鍛える…

強いて向いてる職業があれば、きっと仙人しかありません

まあ仙人といっても、教えられることは何一つありませんが…

話が逸れました

ところで、達也くんは排尿と排泄を同時に行うのですか？

そんな芸当ができるならもっと早く教えていただきたかった所存でございます

もう少しで、排泄物の処理をしていた私が、尿素たっぷり含んだ液体を浴びる所でした

…早く帰ってきてと、ただただ切実に私は願います

そう台詞を締めくくると受話器を置く

留守番電話だから、姉の返答はない

嫌がらせの伝言を残して、達也を見る

静かな寝息を立てて眠っている

リビングの中央に引かれた彼専用の布団

その上で小さな胸を上下させている…まさに生命の、人の原点を顕すが如く、か弱くも力強い姿

透也はいつの間にか、小さな彼に見とれていた

今の一瞬だけではない

今日、彼と出会って無意識のうちに、達也を見ていた

- - 何か…、俺の何かが変わるかも知れない。

大袈裟な表現かも知れないが、透也の心情は今日一日で確かに変化している

2年目のまだまだその世界の新入社員だが
曲がりなりにも（残念な事だが）
彼は、立派な引きこもり型ニートである

沙夜子の乱暴なお願いで、部屋から出らざるを得ない事態になってしまったが

2年という月日の重い扉を開いたのは沙夜子ではなく、達也じゃないか…と本人は感じていた

しかしなぜ、赤ん坊が自分の心の鍵を持ち合わせていたのかは、全くわからないのだが…

そんな期待とも不安とも判断できない複雑な感情が透也に芽生えていた

すっかり自分の世界に入り込んで思考を巡らせていると

玄関扉が開き、外からの空気圧が家中を少し揺らす

家には透也を含めて二人しか住んでいないのだから
それは、母が帰ってきたということを知らせる振動だった

母の「ただいま。」の声はない

何故なら、いつも帰ってきてても家には彼女、一人だから

二人いるはずの家から、「おかえり。」の返事が無くなってしまったから、彼女は「ただいま。」をやめた

誰も居てなくて返事がないのと

いるはずなのに、返事がないのとは辛さが違いすぎた

だから、いつも通り家に入り、玄関扉の鍵を閉めて

無言のまま、リビングに向かうためせつせと廊下を歩く

リビングの扉を開けて片手に持つスーパーの袋を下ろすと、聞き慣れない……すっかり聞き忘れたあの言葉が聞こえた

「おかえり。」

リビングのテレビに顔を向けたたま、透也が母にそう言った

「ただいま。」

戸惑いの様子もなく、透也の母……槇子^{まきこ}から返事が帰ってきた

沙夜子からの連絡で透也がリビングに居ることを予想していたのだから？

どのみち、母の考えていることはわからない……と透也は、思考を停止させる

相変わらず、透也の顔はクイズ番組を映し出すテレビの方向へと向けていた

テレビは見えていない

母と対面するのが気まずくて顔をリビングの端へと背けたいのが本音だった

槇子は買い物袋から、食材など取り出して冷蔵庫へと移動させる

二人の空間には無言が続く

まだ槇子が帰ってきて3分も経ってないが、透也は凄く長く時間を感じていた

このまま黙って、自室に戻ろうとも考えた

しかし、身体が動かなかった

それをしたら自分自身で、また自分の殻に閉じこもってしまうのがよく分かったから

以前なら、こんな風にも思わなかったのに…

やはり、今日一日で達也から何らかの影響を受けている気がする、と透也は確信した

「ご飯はどうするの？」

不意に投げ掛けられた言葉は、静寂を破った

外の植え込みに住み着いている夏虫の鳴き音も
司会者のフリに必死で喰らい付く解答者の声も

静寂を成していた音達も、静まった気がした

「た、食べるよ。」

スムーズに答えれたかどうかは、透也には分からなかったが、問題はそこではなかった

端から見れば親子の何気ない会話だろう

しかし、冷戦状態にあった大国がやっと停戦協定への一步を踏み出したような

そんな二人の間の問題を…ほんの少し解決の方向へと歩みだすことが出来た会話だった

透也の言葉を聞いて、槇子は「ふふっ」と少し笑ったような声が

透也の背中越しに聞こえた

食卓に座る

今、向かいには達也じゃなくて、槇子が座っている

沙夜子の美女としての遺伝子は、槇子からのものだろう

それほどまでに、年齢を感じさせない若々しさと、黒いロングの髪が際立つ整った顔立ちをしている

槇子はよく「和風美人」と言われていた

透也の知りうる女性の中でも、槇子ほど着物が似合う女性はいない
そんな沙夜子とまた違う美女が、七海家には…いたはずだった

透也がちゃんと槇子の顔を見たのは、2年前

2年という月日は、確かに短くはないが槇子の顔からはそれ以上の時間が流れたように感じる

まるで未来の彼女が現在にタイムスリップしてきたかと思わせるほど、彼女の顔は老け込んでいた

仕事に疲れているだけでは、こんな顔にはならない

原因ははつきり分かっていた

これは透也が自分の殻に籠っていた代償
自分のまいた種の痛みを初めて見る

…考えが、思考が、頭を過ぎると胸が酷く苦しくなってきた

「なにさつきから私の顔をジロジロ見てるの。早く食べなさい。」

母、槇子の一言で思考が停止…というより吹き飛ば

吹き飛ばと言っても、いい意味での吹き飛ばではなく

今はとりあえず頭の隅の彼方へ置いて置くために考えを吹き飛ばしたというのが現状である

「ああ…。い、いただきます。」

おかえり。

いただきます。

こんな簡単な挨拶もスムーズに口に出来ないなんて…本当にこれまでの生活はどうかしてたな、と透也は思った

テーブルに出されたカレーライスを一口

2年ぶりの温かみのある母の味は美味しかった

しかし、それ以上の感慨深い気持ちは沸いて来ない

なぜなら、会話もない雰囲気は今もなお続行中だからだ

料理の味を構成させる要素の一つに、「シチュエーション」も大事だな、と透也は改めて思う

槇子は、顔色を変えず黙々とカレーを食べる

本当に顔から何を考えているのか察しがつかない

- - 俺のことどう思っているのか。

22歳の息子が母に対して聞く話題にしては少々、問題を抱えるが

透也は目の前に座る母を時折見ながら、その話題をいつ切り出そうかタイミングを計っていた

気がつけば、深夜を過ぎている

達也は寝言（言葉になっていないが）をあげて、槇子と透也は何も喋ることもなくテレビを見ていた

槇子は食卓の椅子から立ち上がり

「お風呂、入ってくる。」

とだけ言い残し、リビングから去っていた

まだタイミングを計っていた透也は、『お風呂から上がって来たら絶対に聞き出す』という自分ルールを設けて、その時を待つ

テレビの音よりも、柱に掛けられた壁時計の秒針の動く音がリビングに響く

テレビは深夜の通販番組を映し出している
もちろん、透也は見えていない

『見る』というより『眺めている』が正しい

そんな眺めていた視線も焦点が合わなくなる

この時間帯は、透也にとって活発な活動時間である

がしかし、本来眠っている時間に起こされたうえに

今日一日で慣れないことを沢山したものだから、疲労が大きい

瞼にかかる重力が一気にのしかかってきた

起きなければ、という意識はあったものの普段から『忍耐』から掛け離れた生活を送る透也は、一瞬で睡魔に圧倒される

- - 今日一日は色々でありすぎて疲れたんだな。

と誰に向けられたか、わからない思考に納得して、透也はソファにへたり込んだ

朝、目が覚める

達也の泣き声に起こされた

母さん早く止めてくれ、と透也は眠りながら懇願するが止まる気配はない

やれやれ、とソファから立ち上がり背伸びをする

少し背中が痛い

ちゃんと布団で寝ればよかったな、と後悔

隣に手足をばたつかせ、布団で泣き叫ぶ達也

オムツを開けば、どこからそんなものを出したのだ、というくらい立派な異臭を伴うアレ

古いオムツを丸めて、ごみ箱に入れて

すかさず新品のオムツをお尻の下に引くために両足を揃えて持ち上げる

その一連の流れが彼の中のスイッチオンなのかどうか、透也には解りかねるのだが

達也の足を持ち上げた瞬間、彼の股間から尿素を含む水分が放たれた透也の顔面へまともに喰らって、固まっていると

まるで狙った罠が見事に引つ掛かった相手を嘲笑するように達也はけらけらと笑い声を上げながら機嫌を取り戻した

- - もちろん、赤ん坊の彼に悪意はないのは、本人もよく理解しているが。

朝の洗面にしては、些か衛生面において配慮にかけるものだが、寝ぼけていた意識がすっかり覚めた

昨日、『ダブルバスター二重排泄』の対策について学習したつもりがまんまと寝起きの油断しているときにやられた

時計の短針は、『10』を指した頃

ミルクを飲み終えた達也は、再び夢の世界へ飛び立っていった

蝉が一斉に合唱し始めて、昨日より強烈な日差しがカーテンの隙間から照り付ける

テレビに映し出しされるニュースは、今日一日、猛暑日となります

と流れている

「はあ……。」

と透也はため息

母はもう仕事に出たらしく、達也のミルクと透也の朝飯が食卓にあるだけで、姿はない

昨日は、結局何も会話ができず完全にタイミングを逃してしまった

二人の空気に距離があつて、それを押し拓けるのは労力がかかりそう

慣れてないことは急にするもんじゃないな、と透也は感じていた

心労のせいかな…大分眠い

大股を開いて、両腕を後ろに垂れ流す形でソファに身体を預ける

「はあ……。」

と透也のため息は2度目

次は、すっかり昼夜が逆転してしまった（正確には昼夜が元に戻る）
生活環境の激変に身体が辛いという悲鳴

昼寝にしては早い時間帯かも知れないが、彼の頭にはすでに寝るか寝ないかの葛藤が起きていた

熟睡しているはずの時間帯に起きているのは辛いことこの上ない

しかし、それでも耐えて瞼を開いている

忍耐知らずの透也が眠らないのには、ちゃんと理由がある
眠ろうにも、達也が気になって眠れないのだ

眠っている間に、何かあれば大変なことになる
何度もあくびをしながら母を待った

今までの生活と一番違うこと

それは生活に『目的』
が出来たこと

時間の中に浮かぶように身を任せ無産的生活を謳歌し、欲求を満たす以外に特にすることもなく…

それは最早、『生活を送る』というよりも『時間を送る』という奇妙な文章だが、表現としては正し克的を得ていた

そんな毎日に、突然『子守』と『帰りを待つ』という目的が追加されたのだ

何もしなくていい

のと

何かしなければならぬ

のは大きく違ふ

そんな目的に縛られた（大袈裟な表現だが彼にとっては）

生活は嫌という感情は、あまり彼自身が思うよりもなかったのだらうか？

2日目の時点で多少なりと慣れて、特に拒絶反応を起こすこともなく現実を受け入れていた

しかし、問題は他にある

目的に縛られること……つまり、子守をしながら母の帰りを待つということをしながら
今まで通りの彼のライフスタイル『時間を送る』を貫くのは苦痛以外の何物でもない

現に睡魔との激闘中で、彼の体力ゲージ（意識が飛ぶ時間）は残り僅かとなっている

『何もしない』がこれほど苦痛で眠気を催すものだと思わなかった

……では、何かすればいいじゃないか！という考えに至るまで、そ

う時間はかからなかった

達也は、はしゃいでいた

それは、まだほんの僅かな時間しか共にしていない透也でも分かった
手足をばたつかせながら、透也の首筋に後ろから噛み付く

まだ、歯はないので、噛み付くというより…しゃぶりつくという感じだ

「くすぐりたい…テンション、ハイだな。達也くん。」

タオルで首筋についた唾液を拭い去り、背中に背負った剣を握りにいくように、腕を伸ばす

達也の頭にある日差しよけ帽子を鏡越しで被り直す

透也も鐔つばを後ろに向けた野球チームのロゴが刺繍された帽子を被り準備を整えた

「い、いつてきます」

誰もいない家に噛みながらも、挨拶と一礼

背中に達也を背負い外へ出るその姿は…当の本人からすれば、不本意な話だが

ベビーシッターそのものだった

家をでること5分

透也は勢いで行動したことに、激しく後悔していた

家でじっとしていれば睡魔が襲ってくるので、何かしようと思考を巡らせた結果、『散歩』という選択肢が弾き出されたわけだが

真夏日の炎天下でひたすら歩くのは、愚行に近い行為

それだけでなくとも2年という歲月、外界との接触を絶ってきたのだから、いきなり外に飛び出す行為は体力面だけでなく精神面でも辛い

- - 暑さと眠気で頭がどうかしていたんだ。

透也はそう自分で納得させて、家から駅前まで続く長い、やや勾配のある坂を下りきった

財布から200円を取り出し投入

透也が愛飲しているお茶を買い、半分近くまで一気に喉に流し込む

お茶が欲しくて、再び首筋に噛み付く達也

透也は、やれやれとお茶を後ろに背負う赤ん坊に飲ませた

ほとんど、お茶は達也の口からこぼれて、透也のＴシャツの肩をびしょびしょに濡らせただけであったが、達也は満足げにお茶の入ったペットボトルを手で押し返し、拒否を示した

「さて、どうしたものか。」

びしょびしょでお茶の香りがするＴシャツについて、思考していたのではない

十分に水分補給したところで、どう家に帰ろうかと思考していた

まだ家を出て１０分も経っていないが、透也の切るカードは『帰宅』の２文字以外、存在しなかった

このまま下りてきた坂をまた上るのは、かなりの決断力を要した

彼の残体力と消耗体力を計算すれば、坂の４合目くらいで、彼の足は止まるという結果が導き出され

坂を上るといふ選択肢は、消失した

帰宅ルートは、来た道を折り返す以外にもう一つある

『バスで帰宅』だ

というより、透也の頭に『帰宅』というワードが過ぎってから、すでにこのバスフラグが立っていた

駅前から、グルッと町内を一周するバスは、ちょうど道程の半分くらいのところでは家の前で停まる

大分、大回りしなければならぬが、この暑さの中歩いて、万が一達也が熱中症になってしまつてはシャレにならんのである

と、悪い都合を背中に背負う赤ん坊に押し付けるようにして自分を正当化した

駅前のバス停には、日陰はあるものの効果的な涼しさは得られなかった

円を描くように町内を走るバスは、現在地から見ると目的地はちょうど反対側

国際文化会館経由の右回りと
市民プール経由の左回りがあり

到着時刻は、厳密にいうと右回りの国際文化会館経由の方が2分ほど早い

先にバス停に到着した市民プール経由の左回りの経路をとるバスに乗り込んだ

2分ほどの時間なんて気になんてしない

それよりも早くクーラーで冷えた座席に座る事で頭の中はいっぱいだった

背中に達也を背負う透也は、汗だくになりながらもバスに乗り込む扉がパタンと閉まると、うるさい蝉の音が乾いた夏の外気と共に車内から閉め出される

それと同時に効き過ぎたクーラーの冷えた空気が熱を持った肌を癒し、そして肺を満たす

きつと世間では夏休みなのだろう

車内には市民プールまで待ち切れず半分水着姿の小学生の団体や、ラフな格好をしたカップルの姿が目立つ

逆に文化会館経由を選択すれば、おじいちゃん、おばちゃんの多い車内になっていただろう

透也は車内の一番奥にある座席まで移動し始めた

バスは動きだし、揺れる車内の中、うまく体勢を取りながら、一歩一歩と確実に進んでいく

一歩踏み込む毎に、他の座席に座る人達は、物珍しそうに透也と達也の姿を見る

- 俺のじゃない。あんまり見るな。

と一人呟くが、誰にも聞こえない音量だったので誰も気付いてない透也は、少し不機嫌になりながらも達也を前向きに抱っこさせて、目的の座席へ腰を下ろした

窓の外を見ると、道路脇に植えられた街路樹達と、大きな白い雲と7月の晴天がよく似合っていた

達也ははしゃぎ疲れたのか、赤ん坊の本能にしたがってなのか絶賛爆睡中

「【次は善道寺前です】」

機械的な女性のアナウンスが車内に響く

都内とは行っても、都心部から外れたところにあるわけで、ビル群などは主立って建っていない

新築の住宅街が多いこの町に、ボロボロの囲いに囲まれて、その寺はポツンと存在している

昔、悪い神様がこの辺で暴れていて、見兼ねた寺の住職が、説教したことにより、善い神様になったというエピソードが、この寺の名

に由来する

だからこの町の子供は

【イタズラする悪い子供は、善道寺に閉じ込める】
と脅されて育っているはずだ

そんな寺のエピソードはいらない

大事なことは、今その寺の名前を聞いて嫌な予感が彼を襲ったということだった

透也は、寺に近付きたくなかった

いくら、普段からバスを利用しないといっても、深く考えれば気付くはず

- - きつと暑さと疲れで思考回路がヒートしているんだ。

と彼一人で話に決着をつけると同時にバスは善道寺前に着いた

バス停には白一色のワンピースと少し小さな麦藁帽子が被った若い女性が片手で鞆を持ち、もう片手で風に揺れる帽子を押さえて立っていた

透也はその女性を目にして息を呑む

美しさに見とれていたのではない…

彼の悪い予感が見事的中したからだ

その肌は際立つように白く、日差しを反射していた

ドアが開き、バスに乗り込むその姿でさえ優雅で美しかった

車内の老若男女問わず、彼女の一挙手一投足を目で追っていた…

- 最後列に座る、赤ん坊とそれを抱いている男を除いて

バスは、最後列の座席以外は空席はないので必然的に彼女は、そこへ向かう

バスの長さはそんなにない

したがって彼女はすぐに透也を認識した

目と目が合いながら、お互いの距離が近付く

目が泳いでいた透也と対照的に彼女はまっすぐ見据えるように透也を見つめている

バスが再び走り出して、揺れると同時に彼女は透也の目の前で立ち止まった

「こんにちわ、透也くん。久しぶりね。」

2年前まで恋人だった彼女からのファーストコンタクトだった

第二話【再会と、Encounter】

…なぜ、外を出歩こうと思ったのだろう。

なぜ、バスに乗ったのだろう

反対側のルートをなぜ、選ばなかったのだろうか

今、この自分の感情に折り合いがついていない状態で一番会いたくない人と遭遇してしまった

彼女と遭遇しない選択肢が無数に存在しているというのに…

悪い予感は当たってしまった

透也が『引きこもり型ニート』になってしまったのは、少なからず彼女にも原因がある

遡ること、2年前…

目の前に立つ美しい女性、ぜんどうかうあひ善道香織はかつて透也の恋人であった

今でこそ透也はルックスのカケラもない不健康青年であるが

当時は、可憐な姉の弟は良い男という定説（？

）に逆らうことなく、普通の男前だった

馴れ初めは、単純かつよくある共通の友達から知り合い

時間と共に恋仲に発展していき、彼女から別れを告げられて…つまり、透也がフラれて恋は終わった

ただ、透也にとって初めての『恋人』だったので今だに『好意』を捨てられずにいた

「隣、いい？」

と透也に聞いただけで、返事を待たずに同じ座席に座る

透也は、固まっていた

ただじつと天災が過ぎるのを待つように固まっていた

会いたかったけど会いたくない人

初めて、恋というものを教えてくれた人

不甲斐ない自分のせいで、幸せにすることができなかった人

人生で一番愛してる人

『善道香織』

この名前を聞いただけで、鼓動が収まらなくなる

「透也くん、凄く変わったね。驚いたよ。」

透也は喋らずとも、香織は話を続ける

「見ない間にパパになったんだね。」

香織は少し、切なそうに達也を見て頬をプニプニと突いた

「ち、違う。これは姉貴の…！」

あれだけ開かなかった透也の口が、咄嗟に言葉を吐き出した

その勘違いだけは、訂正しないと透也の心は持たないと、自ら感じ取った

「ふふふっ…冗談よ。透也くんに似てないもん。」

香織のその言葉にホッと安堵が胸に広がる

「透也くん、やっと喋ってくれたのにまだだんまり？」

「あ、いや、…その…。」

ただ歯切れの悪い言葉を並べるしかできなかった

…香織が視界に入ってからまともに頭が回らないのだから

「抱っこさせてー！」

香織は、そういいながら達也をすでに抱き抱えていた

口より早く行動を起こしてしまうその性格：2年前と比べて香織は何も変わっていない

変わり過ぎてしまった透也は、何も変わっていない香織に安心感を覚えた

「可愛いー！！お肌スベスベだね！名前は何て言うの？」

達也に頬擦りをしながら香織は聞く

美人に抱かれて、達也はどこか機嫌がよさそうに見えた

きつと自分の思い込みだけど、と透也は納得して

「達也だよ。」

と透也は答えた

バスが大きく揺れた

最初は地震と思ったが違うみたいだった

他の乗客も、目の前にいる香織も騒ぐような様子はない

勘違いか？と答えの出ない自問自答して再び、二人に視線を戻す

バスが再び揺れる

次は確かに、はっきりと大きく揺れて地震ではないことを確信したバスが揺れたのではなく、自分の視界が揺れていたのだ

視界を揺らすほどの強烈なデジャヴ…

香織が赤ん坊を抱いて、まったく同じセリフをどこかで聞いたことがある

脳内のどこを検索してもそんな光景は目にも耳にもしたことがないが、透也の心はそれに反するように「どこかで絶対に見たことがある」という感覚に襲われていた

「どうしたの？大丈夫？」

考え込んでいた透也を気遣って、香織は心配そうに目を大きくして見つめた

「大丈夫。」

そう言葉を返して、自己嫌悪に陥る

ついに自分の頭は変な妄想…というより幻覚だ

幻覚を見てしまうほどやられてしまったのか、と透也の肩は落ちた

デジャヴにしては鮮明過ぎて、奇妙な気分で気味が悪い

『次は、松ヶ枝町です。御降りの方は停車ボタンを押して下さい。』

透也の家の目の前の停留所の名前が車内に響く

透也は停車ボタンに腕を伸ばすが、すでに香織が押していた

「次で降りるよね？」

「ああ、うん。」

気まずい雰囲気は、相変わらずだが、やはり別れの時が近くと、名残惜しさが透也の胸を掻き回す

達也を返してもらって、長かった散歩はクライマックスを迎える

何か、言わなければいけない気がした

けど、このフワフワに浮ついて行き着く先が見当たらない気持ちを言葉にする術を透也は持ち合わせていない

前方に家が見えてきた

言い出すタイミングを計っていたが

「元気そうでよかった。」

満面の笑みを透也に向けて、放ったその香織の一言で、透也のタイミングはまたしても完全に逃してしまう

『松ヶ枝町、松ヶ枝町です。』

機械的な声が別れの場所の名前を告げる

「また、どこかで。」そう言い残して、バスから降りた

車内から笑顔で香織は手を振っていた

しかし、その笑顔はどこか寂しさを漂せていたことに鈍感な透也も気付いていた

汗ばんだ身体をシャワーで洗い流し、透也はベッドに倒れ込んだ

日は沈まりかけて、鮮やかなオレンジが窓から差し込む

ベビーシッターとしての1日目の終盤戦

まだ2日間もあると思うと身体がベッドにめり込むような重たさを感じた

身体を奮い立たせて、寝ているはずの達也の様子を見に行くため、リビングに降りていく

善道香織…

その名前だけで、彼の心を強く揺さぶる力を持つ

彼女がみせた最後の切ない笑顔は、何を意味していたのだろうか

1階へと続く階段を降りながら透也は、一人で考えても到底解決できそうもない疑問に頭を悩ませていた

リビングの中央にはやはり達也が深い眠りについていた

母親に丸一日会わなくても、全くと言っていいほど、泣き叫んだり、「ぐずる」ことはなかった

よくよく考えれば、凄いことで今更ながら、透也はその事実につき気付いた

見れば見るほど、天使のような寝顔だ

ただの赤ん坊ではない…雰囲気は達也は持っていた

それは一体何なのかとは断定できないけれど、達也と一緒にいるだけで自分が変わっていくのを強く感じる

昨日と今日で劇的に変わった…気がする

透也の回りは、何も変わってないし彼が「変わったか？」と聞けば、「何も。」と返してくるだろう

しかし、彼の中では劇的に変わっているのだ…恐らく

断言できないのは

まだ自分の変化に対して抵抗があるから

変わりたいのか、変わりたくないのか
まだ彼の中で決めかねているから

まだ断言はできない

もうすぐ、母が帰ってくる時間だ

珈琲を飲みながら、テレビを眺めているのは透也

もちろん、隣で達也が眠っているから消音

BGM感覚で眺めているだけだから、消音でもなんら問題はない

時計の針が動く音

夏虫の音色

『明日は何をしようか』

夏の空気を吟味しながら透也はそんなことを考えていた

2年ぶりに明日が待ち遠しく感じる

達也の子守は、楽ではないが嫌でもなかった

それほどこの小さな命は魅力的な色を放っている

汗ばんだ達也の額をハンカチで拭きとったその時だった…

「……！」

夏虫が静まり

時計の動く音も聞こえない

そのかわり、強烈な耳鳴りが透也を襲う

油断すると意識が飛びそうなほどの大音量

達也にもこの怪音が聞こえているのだろうか？

大声で泣き叫んでいるが、透也の耳に入ってこない

謎の音が収まると、テレビも部屋の照明も一斉に消えた

透也は急いでカーテンを開ける

この家だけ停電したのではなく、町内一帯に光が見えない

まるで、別世界の景色のように一つも明るみのない闇夜がそこにあつた

「何が起こってるんだ…。」

思わず透也の口から漏れる困惑

大停電に対して、落ち着きを取り戻そうとダイニングキッチンの蛇口をひねって、コップに水を注ぐ

コップの水が揺れる

透也の手が震えているのではない

再び、あの強烈なデジャヴの時の様な視界の揺らぎが透也を襲う

魂とその入れ物が別々に引き裂かれそうな揺らぎ

『空気の振動』というより、『空間の振動』

ただ、透也は達也を守るように被さり、パニックにならないようにじっと冷静に耐えるしかなかった

振動が始まって1分を超えたその時、家から数百メートルも離れていない場所で爆音と共に、世界の終わりが始まった

黒鉄の鎧を身に纏う巨人が一体、闇夜にその身体を溶かせて静かに立っていた

ただ鎧の隙間のスリットから、血のように紅い色の不気味に輝いていて、頭部の両眼は虚空を眺めている

その世界の理ことわりから外れた存在に気付いた人々は、叫びを上げて逃げる者もいれば、祈るように立ち尽くす者、身体を動かせずに震えている者もいた

闇に覆い被るその町は混乱の渦へ飲み込まれていた

透也も騒がしい外の異変に気づき、再び窓から様子を伺う

耳鳴り、振動、爆発、巨大ロボット…

今起きた出来事を冷静に脳内で並べたが、理解できる術も時間も透也に残されていなかった

黒鉄の鎧を纏う、巨大ロボットは、一步一步力強く透也の家へ近付いて来る

このまま家にいても、瓦礫と共に押し潰されてしまう

最低限の水と食料をリュックに詰めて、達也を抱き抱えて家を出た

透也の姿はTシャツにトランクスという風貌だったが、その姿でも違和感なく町を走れるくらい、現状は危機的状况だった

静寂だった夜が、一変して人々の悲鳴と巨人の歩く地響きによって混乱の夜に変わる

この町は山に面した住宅街なため、主な道路は普段でも車が通行するには幾分か細い道

逃げ戸惑う人々でその細い道も車一台もまともに走れない状態であった

所々で、乗り捨てるように置かれた車が何台も目にする

恐らく、車で逃げようと試みたが降りるしかないと判断したのだろう

透也はリュックと達也を背負い、必死で脚を回転させる

体力なんてとつくに失くなっていて呼吸も荒く、汗が止まらない

それでも逃げるしかない、まだ死にたくないから
達也を死なせたくないから

こんなに必死になっているのは、なぜなんだろう

自分の部屋に籠っていた時は、いつ死んだって悔いはないと思っていた

いざとなったら、やっぱり死にたくない

死ぬのが怖いんじゃない… やっと『明日』を見つけたから

胸が苦しくなる

透也の頬には、涙が流れていた

それは恐怖ではなく、後悔の涙

- 母さん、迷惑かけてごめん。まだ謝れていないし、ごめん。

- 姉ちゃんも心配かけてごめんなさい。

- 香織…。また会いたい。

走りつづけていたスピードが次第に落ちてくる

人間の速度では、やはり巨大ロボットとの差は縮まってきた

全長約18メートルの巨大な一歩は想像以上に距離があつた

右に左に曲がれど、後ろを振り向けば巨大ロボットが正面を向いている

最初は勘違いだと思っていた

巨大ロボットの後ろに回り込むように逃げていたのだが、背中は一
向に見えず、眼光はこちらを捉えている

透也の疑問は確信へと変わった

「なん…でだ…よ。なんなんだよ!!」

息を切らしながら漆黒の巨人に向けて叫び声を上げる透也

巨人の狙いは十中八九、透也と達也

街を破壊するでもなく、ただ淡々と逃げる透也の後を追っていた

その証拠に同じく逃げていた周囲の人々は、いつのまにか難を逃れ、透也と達也だけが孤立している

なぜ、狙われているのだろうか…透也にはそんな心当たりはもちろんない

対面して、さらに圧倒的な質量差の違いを身体で感じる

逃げている間に幾分か冷静さを取り戻せたが、それでも透也の頭はパニックになっていた

静かに見下ろしている漆黒の巨人が、手の平を広げた右手を透也に向ける

すぐに死が待っていると覚悟した透也は後方にあるゴミ袋の塊に向けて、達也を放り込もう決意

背負っていたリュックもろとも投げるモーションで構えた時だった

空間が再び、振動する

透也の膝がガクツと折れて、両手で地面を付く

両手からリュックだけが滑り落ちていてそのまま地面に叩きつけられる

達也は、地面に衝突することなく浮いていた

すぐさま透也は立ち上がりとうとするが、地球の重力が何倍も強くなつたように目に見えない力で身体を押さえ付けられている

それとは逆に目の前で、達也が泣き叫びながら万有引力の法則に反して宙を漂う

- -あの漆黒の巨大ロボットの力なのか？

もはや、何が起きているのか、どうなってしまふのか推測もできず、混乱を極めた

成す術もなく、伏せることしかできず、達也と巨人とこの世界の行く末を透也はじっと見つめる

漆黒の巨人が目の前で膝を立てて、しゃがみ込む

頭部に対して二対に大きく伸びるアンテナは、鋭い角

左右と真ん中にある3つのアイカメラ

そして、分厚く闇より深い漆黒の鎧

悪魔、魔神と表現するのに何ら違和感なく

と言うより、悪魔や魔神という言葉はこの巨大ロボットを表現する為の言葉だと透也は感じていた

圧倒的で異質で絶望を具現化された存在それが今目の前に立ちほだかり

その巨体の胸部からハッチが開き、中から魔神を操るパイロットらしき人物が、まるで目に見えない階段を降りるように宙を歩きながらこちらへ近付く

人間なのか、人の形をした宇宙人なのかはつきりとわからないが

なぜか『人間臭さ』を透也は感じ取っていた

風貌はいかにも宇宙人、というくらい肌に密着する紫のラインが入った銀色のボディースーツを身に纏いフルフェイスヘルメットを被っている

男か女かも判断しにくい線が細い身体と、幻想的な雰囲気更に不気味さを増す

ゆっくりと、一步一步こちらへ近付く

そして透也はすぐに感じ取った

・・・この異質な者の狙いは、『達也』だ
...と。

なぜ、達也を狙うのか？そんな理由を考えるより、体を奮い立たせるもうすでに達也の目の前まで、異質な者は来ていて、透也は自由の効かない身体を必死で動かす

抵抗を続ける透也に気付いたのか、異質な者は顔だけ（フルフェイスだから表情は読めないが）を伏せる透也の方向にむけて、指を一つ

パチンツ

と鳴らした

その音を聞いた直後、透也の身体を押さえ付けている見えない力が更に強まり、骨や筋肉、内臓が悲鳴を上げる

顔を上げるどころか、声を上げることも困難になり、目だけを動かして達也と異質な者を見つめる

異質な者は、両手を広げて泣き叫び、暴れる宙に浮く達也を抱き寄せた

それはまるで、念願の宝が手に入るかのように大切に彼を抱いた抱き抱えると、パツと振り返り天を登るように来た道をひきかえしていく

透也は小さく遠ざかっていく、異質な者の背中を目で追いかけることしかできなかった

異質な者の背中を見たのが最後の記憶で、どうやら意識が飛んでいたらしく視界がはつきりとした時には達也も巨大ロボットもいなかった

街も、静寂な夜と家の明るさを取り戻していた

一瞬、悪い夢を見ていたのかと思ったが、それは単なる現実逃避だ
と思い知らされる

「…つく!!」

見えない力から解放され、透也は立ち上がろうとしたが全身を強打
したような痛みが彼を襲い、すぐさま膝をついた

痛みが夢ではないということを嫌でも知らせ、明かりを取り戻した
街も人気を感じなかった

空虚な心が胸いっぱいになり、自失呆然なった透也は道路の真ん中
で大の字で横たわる

「…夢じゃ…ないか。」

悪い夢であつて欲しい…そう願いながら夜空を見上げる

彼の暗闇の気持ちも知らずに、散りばめられていた星達は美しく輝
いていた

その星々が急に数を増やす

いや、空間が振動を始め、揺れ動く視界がそう錯覚させていた

- -あの耳鳴りと共に。

透也にはもう動揺も驚きも見受けられない

半ば、この一連の出来事について思考を働かせることに対し、諦めの気持ちが大きく『次は何が起こるんだ?』といった傍観者のこの事象を見守っていた

再び、街の光はぼつぼつと消えていき、星達が一層に輝きを増し

耳鳴りとはいっても、どこか心地好く、天使の歌声のような音が辺りを響かせる

- -その出逢いは、一瞬だった。

- -その出逢いが、彼を大きく変化させる旅へと誘った
いざな

視界というのか、空間というのか

適切な表現が思いつかないが『景色』が3秒ほど大きく^{ねじ}捩れ、次の瞬間には元に戻っていた

捩れと共に出現したのは、漆黒の巨大ロボットではなく

白と青、原色のコンストラクションが機体に映える、戦闘機が一機、

姿を現わせ、透也の目の前で垂直に着陸した

戦闘機というのを実物で、しかも真近で目にしたことはないが

静寂な起動音と、垂直着陸が可能なことから、戦闘機という表現があまりにも似つかわしくないほど高性能な機体だと容易に推測できる

「……あの巨大ロボットと、何らかの関係は必ずある。」

それが透也にとって味方なのか、敵なのかわからないが

達也を取り戻す唯一の手掛かりだということは理解していた

戦闘機の胴体部分の下部ハッチが開き、パイロットが降りて来る

「ちえー、EDポイントはここであってるはずなのに……また逃しちやったよお。」

宇宙人でもなく、未来人でもない

ただのどこぞのセーラー服をきた女子高生が戦闘機から降りてきた

第三話【セーラー服に、Combat plane】

巨大ロボットの出現

甥っ子の誘拐

そして、高性能の戦闘機（？）から舞い降りたセーラー服を身に纏う美少女

悪い夢であってほしいと、何度願ったか

それほど、今日という一日は訳がわからなかった

きつと頭で理解することは不可能だろうけど、人間というものは自分の知らないものを知りたがる

それが謎を含んだ未知なるものほど

透也も例外なく、その服装と無骨な戦闘機がどう関係し、さらに彼女は何者なのか知りたかった

「EDチャージまで時間はあるから、まだ【この世界】にいるはず……。」

独り言をブツブツと喋りながら、辺りを見渡すセーラー服の少女

――やっぱり日本語だ！！

瀕死とまでいかないが、体中が激痛で動かない透也は、俯せながら少女の声に耳を傾けていた

先程から少女の話す言語は、流暢というよりそのままの日本語だ

だからといって、宇宙人説を否定した訳ではない

高性能な機体のパイロットだ

高性能な翻訳機を持ち合わせていても、何ら不思議はない

いや、宇宙人の共通語が「日本語」だという可能性もある

そんな非現実的な可能性も、非現実的な環境に置かれた彼にとっては大いに有り得る話だった

「あ…あ、あの…。」

日本語を話すんだから日本語は通じるはずだ

現状を理解するため、何より達也を取り戻すためにも透也は身体を俯せのまま、少女に話し掛けた

しかし話し掛けたものの、声が籠っていて、さらに「あ」としか発音できていない

まるでうめき声をあげながら横たわるゾンビだった

気付く様子もない少女は、円を描くように辺りを見渡すと、再び戦闘機に乗り込もうとした

「ちょっと、待ってくれ！」

激痛が身体中を走りながらも、全身全霊で少女を呼び止める

さすがに気付いた少女は、ハッと振り向き声の在りかを探す
先程、少女が辺りを見渡す限りでは人一人いなかった

いたとしても、Ｔシャツとトランクスしか身につけていない謎の死体が一体横たわっていただけ…

その死体が身をくねらせながら、こちらへ近いてくる

「きゃああああー！死体が喋った！動いた！」

少女は驚きのあまりに、腰が砕けるように尻餅をつく

「いや、ちょっと。喋って動く死体は死体じゃないし……。」

とりあえず、取り乱す少女を落ち着かせようと正論を語るが

視線が低い所為で目の前の少女の細い脚と脚の隙間から、純白のパンティーが視界に入る

続きの単語が頭に思い浮かばず、透也の思考は完全にストップし、目の前のそれ一点だけを見つめた

少女も死体は、死体じゃないという結論にいたると、元死体の彼の熱い視線の先を辿る

彼が何を見ていたのか、すぐに合点すると同時

少女に殺意が芽生えて

「この変態いい!!!」

見事までの踵落としが彼の脳天に直撃した

「そんな格好で道路に横たわって女子高生のスカートの奥を覗く…変態以外に何かありますか？」

「お、落ち着け！これには訳がある。巨大ロボットから逃げるのに必死だったんだ！」

卑下ずんだ冷たい視線で少女は透也を見下ろして
彼女の右手は、風でなびいてしまうスカートをしっかりと押さえ
ていた

「少女のパンティーを2度も見た罰よ！！天誅うゝ！」

左手で握りこぶしを作り、透也に振り下ろすが
軽々と透也は小さな握りこぶしを受け止める

「いやいやいや、2度も見ていない。1回目は不可抗力だった
としても、2回目はない！！」

ぐいぐいと押し迫る拳を押しつけて、透也は反論に出た

「踵落とした時に！また！見・た・で・しょゝ！！」

『しょゝ！！』の掛け声で右足を振り上げると同時に、透也の顔面
が天を仰ぎ、そのまま後ろに倒れこんだ

「で、その巨大ロボットはどこにいったか分かる訳？」

「知るか。」

顔を摩りながら透也は答える

少女の度重なる顔面攻撃に顔の形が変わってないか心配していた

「役立たず。じゃあね、変態。」

そう告げて、少女は再び戦闘機へと足を向けた

「お前は何者だ。」

透也はようやく質問を少女にぶつけた

セーラー服に機関銃は知っているが、戦闘機に乗るのは聞いたことはない

というより、そもそも日本人というか人間なのかどうかというレベルから聞き出さないといけない

150くらいの背丈に少し茶髪のツインテールの髪型

肌はやや日焼けしたような健康的な色

白地にワインレッドのような深い赤い色のリボンと、それと同色のスカートが特徴的なセーラー服

姿形はまんま、日本の女子高生だと透也は感じていた

「それは教えてあげられない。知らない方が貴方の為だから」

後ろ姿を透也に見せたまま、少女は答えた

静寂な夜と月明かり、その世界に溶け込めていない戦闘機が妙な景色を作り出し、少女の姿をより一層、幻想的に映し出していた

「なら、お前はあの巨大ロボットについて知っているのか?！」

身体は地面に伏せたまま情けない姿で、透也は少女を引き止める

少女は足を止めて

「企業秘密。世の中知らない方がいいことがあるの。」

と笑顔で告げたが

その目は、可憐な少女の顔に似つかわしくないほどの激怒と憎しみの感情を映し出していた

その目と気迫に圧倒されて、少したじろいたが透也は引つ込む訳には行かなかった

「…あの巨大ロボットを知っているのなら…」

全身に激痛が走るのを耐えて、立ち上がった
それが彼の決意の表れであるように、真っ直ぐと少女を見据えて、
大地から身体を引き離す

「…あの巨大ロボットを知ってるなら、俺も連れていけ。大事な甥
っ子を取り戻さないといけないんだ。」

静かに透也の声が、意思が少女へ伝えられた
少女は、眉を細めて少し考える

両手を握りしめて、透也は彼女の答えを待つ
まるで、愛の告白の返事を待つような胸の高鳴りが聞こえる

しかし、その高鳴りは、鼓動は、決して期待という感情を一切含ん
ではない

巨大ロボットに奇妙な戦闘機とセーラー服の女子高生

絶対関わりたくない事件に自ら首を突っ込む決断を下したのだ
もしかしたら、死ぬかも知れないし元の生活に戻れない…そんな恐
怖が頭を過ぎった

しかし、頭を過ぎっただけで透也に迷いはない

自分に出来ることは少ない…いや、何も出来ないかも知れない
しかし、自分を変えてくれた達也をこのまま放っておく訳にはいか

ない

『達也を助ける』そんな使命感が今の彼を衝き動かしていた

少女の考えがまとまったようで、再び透也の方へ身体の向きを変える

「絶対無理。」

と告げる

「よし、そうと決まれば早速アイツを追いかけよう！！その前に自己紹介だな。俺は七海透也、よろしく。」

透也は少女に向けて右手を差しだし、握手を求めた

「聞こえなかった？絶対〴〵に無理！！」

少女は、それを無視して戦闘機へ乗り込んだ

鮮やかなブルーで統一された装甲は、流れるようなフォルム

両翼のハネは、鋭利な剣のように斜め前方に伸びて、逆翼となっている

主立った武装は見受けられないが、きっと何処かに隠れてるのだろうと

素人目線では推測しかできない

足廻りのバーニア達が上下左右に準備運動を始めるとまもなくして火が着いた

「…俺も連れていけえゝ!!」

垂直離陸を始める戦闘機の下腹部にある緊急時用ハッチの取っ手を片手で握ると、透也の身体は宙に浮いた

《こらあー!!!『レイゼファア』に触るな!》

と少女の声が機体に取り付けられている外部スピーカーから聞こえる彼女の心配は、透也が高度約40メートルから落下するしないよりも、機体が汚れないか汚れるかという心配

ー・友好的な関係を築くのは望めないな。
と透也は確信を得た

透也をお構いなしに、機体の高度を上げ続ける少女

街の夜景はまばゆいほどの光を放っており、普段なら美しい景色に心を奪われるが、今はそんな悠長な事を考える場合ではない

引き止めるつもりで機体に掴まったのだが、事もあるつか、あのセーラー服の少女はそのまま高度を上げ続けるのだ

とりあえず透也は、両手で、ステンレス製の取っ手を握り直して解決方法を探す

少し離れてはいるが、ハッチを開けるための緊急開放レバーがあることを確認する

腕を伸ばせば十分に届くのだが、片手だと吹き付ける風に煽られて落下してしまう恐れがある

というより、透也の基礎体力は並以下であるため、取っ手に掴まるので精一杯だった

「お、おい！！助けてくれよ！シャレにならない！」

ぶら下がったまま、首だけを下に向けると、街の建物が小さく、一つ一つの家の明かりが星のように見え…まるで天も地も夜空が広がっていた

『高い』という意識が透也の脳内における占有量が増えると、自然と筋肉は膠着し始め、手には汗が滲み、『死』の恐怖が彼を襲う

巨大ロボットの襲撃時に受けたダメージと吹き付ける冷たい風、薄い酸素が彼の疲労を加速させる

どの道このままでは落下して死ぬのがオチであり、薄情者の少女に助けを求めても期待は薄い

ならば、最後の力を振り絞り賭けに出ようと決意し、透也は片手を離した

と同時にタイミング悪く突風が彼を襲い取っ手から両手が離れる
文字通り死ぬ気でもがき、奇跡的に何とか両手で目的のレバーを掴
むのに成功した

一瞬、完全に身体が戦闘機から離れて空中を泳いでいたのを振り返
ると、寿命が本当に縮んだ気がした

けれどまだ助かったわけじゃない
早く安全を確保したいと考え、緊急時ハッチ開閉レバーを握りしめ
て、体重をかける

プシュー！

とガスが吹き出す音が透也の耳に入ると、両手で掴まっていたレバ
ーごとハッチの扉が開いたのではなく、もろとも吹き飛んだ

「嘘だろ…死ぬじゃん。」

虚空の夜空に、投げ飛ばされた透也は、誰に言ったのかわからない
言葉を放つ

- - あまりにも高い所から落下すると、それは『落下』ではなく、
地球に『引つ張られる』という感覚に近いな。

そんな落下した感想を心に述べながら透也は、落ちていく

死ぬ間際は、走馬灯のように思い出が溢れだす

幼少の頃は、姉ちゃんによく虐められた

- お菓子もご飯のおかずも、自分の好きな物ならお構いなしに俺の分から略奪する。

それに対して、抗議をすれば

「男の子でしょ！」「私の弟でしょ！」

の次に「だからお姉ちゃんの言うこと聞きなさい。」

で押し返す…機嫌が悪ければボディブローか、蹴りがついてくる。

あんなわがままで暴力的な女がよく結婚できたもんだ。

けど、何だかんだで結婚式のウェディングドレスを着た姉ちゃんを見たときは嬉しかった。

- …大切な達也を…ゴメン。

子守すら出来ない弟でゴメン。

- 俺は、最後まで迷惑をかけたまま死んじゃうのか。

母さん、いつも優しくしてくれたのに、お礼も言えなくてゴメン。

一番傷ついていたのは、母さんなのに、俺はそれを知ってて迷惑をかけた。

親不孝者の息子で、ゴメン。

- 父さん… あんたに会えるのか。

会いたくないけど、やっぱり会いたいな。

親父って何なんだろうが、って何度も考えたよ。

だからそっちに行ったら……

そっちに行っ…

「嫌だ嫌だ嫌だ！！俺はまだ死にたくないんだー！」

走馬灯が一通り終わるが、死を受容できない彼は泣き叫ぶかといって、落下のスピードが緩むでもなく時間が止まるわけでもなく

虚空の夜空に誰にも届くはずのない声が響いただけで、刻一刻と人生のタイムリミットが迫っていた

手足を伸ばして、大の字になり重力を身体全体で感じながら落下していく

段々と地上の夜空がはつきりと近くなるのがわかる

- もう終わりだ。

人生の終わりを覚悟したその刹那…

「これくらいで泣いてどうするの！男の子でしょ！！」

外部スピーカーを通してではなく、セーラー服を身に纏う少女の生の肉声が聞こえた

その口調、はつきりした声は姉の沙夜子そのものであり、一瞬姉が目の前に現れたかと錯覚した

声の方向を向けば、少女はさっきの戦闘機のコクピットを開いて、両手を腰に当てて仁王立ちし、コクピットシートに立っていた

対衝撃ベルト：いわゆる車でいうところのシートベルトを足に巻き付けて立っている

大体、飛行中の戦闘機の上に立つものじゃないし、バランスを崩して落下でもしたらただじゃすまない

異常とも言えるその姿だが、死を目前にした透也にとってまるで女神が舞い降りたような神々しさを纏い、闇夜を照らした

「ほら、時間がないよ。」

「早く助けてくれえ！！」

「いいよ。そのかわり貴方は、レイゼファーに乗った瞬間、『^{トラス}旅行者』になるの？いい？」

「なんでもするから！早く！」

「はつきり言つて死ぬ方が楽よ？それでも貴方は、貴方の現実に終止符を打てる？」

「おしゃべりは後にしてくれえー！」

透也が少女に向けて、手を伸ばす

あと数十秒で地面に激突する所まで来ている

少女も余裕しゃくしゃくと、一瞬顎に手を当てて、考えるふりをしてその手を差し延べる

交錯した二つの手がお互いを握りしめると、透也の身体はコクピットの引き寄せられて、無事投げ飛ばされるように収納された

地面寸前で機体の先端角度を上げて、重力落下から推進飛行へと切り替える

バーニアの炎が街の道路を焼き付け

機体を傾けたり高度を調整して、迫り来る家の合間をギリギリで翔けていく

街を抜け出して、また再び雲一つない夜空へと駆け登り

大きな満月が戦闘機のブルーを美しく照らした

「いつまで、抱き着いているつもり!!変態!」

「仕方ないだろ!」

コクピットシートに全体重を預けるように座る少女の上に、透也は乗りかかり、腕はしっかりと彼女の首に巻き付いていた

「貴方の名前、まだ聞いてない。」

「お前が聞いてないだけだろ。…七つの海に透ける也と書いて、七^な海透也だ。」

「変な名前ね。」

私は鳳^{おおとり}莢^{りひめ}。鳳凰^{ほうおう}のホウに、莢^{さや}豌豆^{えんとう}の莢^{とう}。」

「お前の言い放った最初の一行をそっくりそのまま返すよ。」

「まだ空の旅が忘れられないのかしら?落ちる?」

「…遠慮する。」

第三話【セーラー服に、c o m b a t p l a n e】（後書き）

遅くなりました（。・。・）

無事三話目投稿です！

ちょっと確認をできてなくて誤字脱字が多いかもしれません（。・。・）
（。・。・）

後日、確認修正するかもな感じでご了承お願いします（。・。・）
（。・。・）

第四話【交錯する、black genie】

今日という一日ほど、死に直面する日は後にも先にもなかろう……いや、あつてはならない
夜空を駆ける戦闘機のコクピットで透也は一日の出来事を振り返っていた

『何が理由で、突然人生が変わるか分からない。だから人は精一杯生きなきゃならない。』

そんな誰かが言った、当たり前だけど、普段考えもしなかったこの言葉の意味を、今は全身全霊で感じていた

つい一昨日まで、ベッドにしがみついていた生活が一変して、謎の女子高生と戦闘機に乗り込んで（死ぬ気で。）

甥っ子を取り返すことになってしまったのだから

よく、この一連の流れを飲み込んで自分は生きていられるなど改めて透也は自分を称賛する

「ちょっと！単座式なんだからね！肌が密着してるからって変な気を起こさないでね。」

透也は少し大きめのコクピットシートに深く座り込み、セーラー服の似合う可憐な少女、鳳莢はそのまま上に乗っかり、対衝撃ベルトを透也ごと巻き付ける

華奢な身体の重さと体温が直に伝わってきた

この戦闘機のコクピットにおける主導権を握っているのは、莢だ
今は言いなりかも知れないが、戦闘機から降りればそんなことはない
決して、すべての主導権を握らせてはいない…
と透也は自分自身に強く言いかけていた

彼女のツインテールが揺れる度、何とも言えない女性特有の甘い香
りが機内に漂う

男性目線から言わせてもらうと、こんな状態で平常心を保つことは
困難である

「…いかんいかん、相手は女子高生だ！例え、宇宙人といえど自分
の良心は許さない！」
と首を振りながら目に見えないものと戦う透也は雑念を払うために、
口を開く

「…よし、とりあえず状況を教えてくれ。」

透也は戦闘機に乗り込むことに成功はしたが、状況はなにも把握で
きていない
質問のウェイトとしては、『雑念を払いたい』というのが大きく占
めていたが

同時に自分の置かれている状況を整理しておきたかった

「…『^{トラベラー}旅行者』になっちゃった貴方を、この多数世界渡航が可能
な『レイゼファー』に乗せて、悪の根源、極地重力操作が可能な『

ヴァルファラ』を追いかけています。」

「……。わかりやすい説明ありがとう。」

耳にしたこともない単語が次々と並べられただけで、英の不親切な説明は終わった

「今のでわかったの、頭かちこいのねー。」

「じゃあ、俺でもわかるようにかみ砕いて、説明してくれ。」

お互いの顔は合うことなく、透也は彼女の背中に、英は目の前の戦闘機を操縦するためのコンソールに話しかけるように会話は続いていく

「……うーん……と少し呻きながら、彼女は考えて

「『親殺しのパラドックス』って知ってる？」

と、突然に英はとても穏やかではなさそうな言葉を言い放ち、透也に答を求めた

もちろんそんな言葉を知ってるわけではないし、一見無意味そうな質問だなと感じたが、透也は不必要な考えは破棄して「知らない。」と一言返答した

「その『親殺しのパラドックス』っていうのは、もし貴方が過去に行けたとしましょ。その行った先の過去は、自分が生まれるよりもつと前の時代…」

その時代の貴方の母親を死なせてしまったら、生まれてくるはずだった七海透也は、もちろん消えちゃうよね？

そしたら『その過去に行った七海透也』も消滅する？しない？っていう疑問がパラドックスなんだけど…

貴方、どっちだと思う？」

「…それは、もちろん消滅するだろ。」

「ぶつぶう」。正解は消滅しない。」

「なぜ？」

「過去から未来へと続く道は、一本道ではいつてこと。」

「…分かん。かみ砕いてくれ。」

「その『過去の母親から生まれるはずだった七海透也』と

『過去に行った七海透也』は、姿形、思想も性格も限りなく同じだけど、別人だってこと。」

「…難しいな。」

「つ・ま・り！！」

この世は、それこそ無限の数だけ『現実』があるってこと。
さつき、貴方死にかけたでしょ？

レイゼファアから振り落とされ地面に叩きつけられて、潰れたトマト
みたいになった七海透也もいるし、

悪の根源、巨大ロボットに踏み潰されて潰れたトマトみたいになっ
た七海透也もいるし、

何事もなく平和に生きている潰れたトマトみたいな七海透也もいる。

「

「どうしても俺を潰れたトマトにしたいのは、よくわかった…。

要するに、可能性の数だけ俺だけじゃなく…もっと広く言えば

『この世界とは違う異世界』

が存在するってことだな。それも数え切れないほど。」

「まあ…そんな感じかな。

ちなみに今説明したのを学者の人達は、『多数世界解釈』と呼ぶの。

そして、このレイゼファアはその『多数世界』を渡って行けるの。

わかった？」

「…うん。とりあえず、その『多数世界解釈』というのを百歩譲っ
て、飲み込むでしょう。」

次の質問が、その…いわゆる、お前とこの戦闘機は『異世界』から
この世界に来たってことであってるな？」

「『異世界』って何だかファンタジーな響きね。

まあ意味としてはあってるけど、ニュアンスが違うかな？

異世界は異世界だけど、『限りなくこの世界の歴史に近い異世界』

から私は、来たの。生まれは、ちゃんと日本だし、世界恐慌と真ん中だったし、戦争だってちゃんと破棄してます。

あと、戦闘機っていうのはやめて。ちゃんとレイゼファーっていう名前があるの。」

「戦闘機は戦闘機だろ。妙な所で細かいな。」

「貴方、私の話聞いてたの？

これはただの戦闘機じゃないの！

無限にある世界の中でもたった一機しかない…唯一、神の理に近い性能を持つ『方舟』なの！」

「まあ、俺の脳はパンク寸前だから名前だけ覚えておくよ。んで、そのレイゼファーは今、俺の大事な甥っ子を連れ去ったあの『黒い巨大ロボット』にちゃんと向かっているのか？」

「ええそうよ。心配しないで。『エーテルの痕跡』を辿って、追いかけているの。…今度こそ逃がさないから。」

今地図上では、どの辺にいるのだろうか

永遠と思えるほど、果てしなく続く海と地平線

すっかり星空は無くなり、代わりに明け方の紫が焼き付いた空をレイゼファーと呼ばれる戦闘機：改め『方舟』が駆ける

『方舟』

『エーテルの痕跡』

『多数世界解釈』

『異世界』

『親殺しのパラドックス』

『旅行者』

夢だと思いたい現実が今、目の前でSFやファンタジーでしか耳にしないような単語達で説明されていく

彼女のそんな説明もとても冗談や嘘だと思えず

かといって、すんなり理解できて受け入れられるほど、透也の頭の容量に余裕はなかった

今は流れに身を任せて、とりあえず達也を取り返そう

考えるのはそれからだ

…もしダメだったら…すべて終わらせよう

一昨日までの透也は、肉体的、精神的にもひどい状態だった

家に閉じこもり、外界と自分を断ち切る

彼の全エネルギーは内側に向いていた

が今は、達也を取り返すという目的に向かって、彼のエネルギーは外側の一点へと向きが変わる

自分自身でも驚くほどの変わりようであると、朝焼けの空を眺めて透也は感じていた

「断続的に微弱なエーテル反応…、挑発的ね。隠れるつもりがあるのか、それとも誘ってるの？」

かれこれ、日本から飛び立ってどれくらい時間がたっただろうか？

海と空とそれらに挟まれている地平線が、コクピットのメインモニターに延々と映しだされていた

変化があったといえば、紫の朝焼けだった空がすでに太陽は昇りきって、いつもの蒼天の空になっていること、と

そして透也の上でレイゼファアを操る少女、鳳莢の独り言が多くなってきたということ

「何を焦ってるんだ。落ち着けよ。」

と、透也は莢の背中に言い聞かせる

別に透也は、彼女に言い聞かせれるほど落ち着いてはいない

むしろ理解不能の状態から甥っ子を取り返す環境に放り出されたといつても過言ではなく
確かな焦りが胸にあった

そんな透也が宥める側に回るほど、莢は焦っていた

数少ないチャンスが巡り巡って来て、それを生かすために必死になっている

そんな雰囲気は莢の背中から透也は感じていた

「貴方に何がわかるのよ！黙ってなさい！」

何も把握してない

何も知らない

何も出来ない

さっき会ったばかりのそんな役に立ちそうもない男から、知ったような口で宥められて、莢の口調は怒りをあらわにした

「…ごめん。」

ただ居座るだけでもきつと足を引っ張っているだろう

何か、少しでも彼女の力になれば…そんな願いは虚しく、謝罪の言葉を述べて、透也は遠くの空を眺めた

「……私こそ、…ごめん。ちょっとイライラしてたみたい。…私は『ヴァルファラ』を捕まえる為に色んな世界を『旅』してるの。アイツと同じ『現実』に居てられる時間は少ないし、滅多にない機会だから…
集中させて。」

透也は彼女が発する言葉の意味を半分も理解してはいないけれど、その小さな背中震わせて、想像できないほどの大きな『なにか』を背負っている
それだけは、確かに 理解できた

「…いた!!」

英のはつきりとした声がコクピット内に響くと同時に
反応を感知した索敵レーダーから警報が鳴り始める

凜としている、いつもの平和な青空が似つかわしくないほどの緊張
感が辺りを包みこむ

辺りを見渡すが、あの漆黒の鎧を身に纏う巨人の姿が見当たらない
本当にこの辺にいるのだろうか？
そんな変化のない青空と海と地平線が不気味さを増していた

刹那、海から水しぶきどころでなく
大きな水柱が立ち上り、黒の球体がこちらに向かって接近する

「捕まって!!」

英の声に透也は、咄嗟に両手でコクピットシート of 両脇を掴む

回避行動に移るため機体が90°傾き、強力なGに襲われながら、視界に映るものすべてが横を向く

青空の空気を縦に斬っていく翼

その真横をギリギリ黒い球体が通過した

「…迂闊だったわ。…真下をとられるなんて!!」

機体の角度を水平に戻して、景色は元に戻る

「あの黒い球体は何だ!?!」

見たことのない物質もしくは、現象だった

現実には相容れないその不気味な黒い球体に畏怖する透也

単なる球体ではことは容易に推測できるほどの邪悪なオーラをそれは、帯びている

黒い色は、単なる黒ではなく『邪悪な漆黒』であった

あの昨夜、街を破壊して達也を奪っていった魔神の色、そのものである

「『圧縮重力砲』」。

貴方の嫌いな黒い巨人が得意とする攻撃よ。

あの地味な見た目に反して、防御手段もないし触れてしまうと一気に球体内の重力渦に飲み込まれて、粉々になっちゃうのよ。」

軽々と状況説明できるのは、莢の勝てる見込みのある自信の表れなのか、それともはったりの強気発言なのか…
できるなら後者でないことを願う透也

そんな祈る間もなく黒い球体『圧縮重力』が二つ…いや、三つ、四つと海上から水柱を上げてこちらに近付く

「口は閉じなさい！舌嚙んで死んじゃうからね！！」

莢は自らの身体を委ねてシートの役割になっっている透也に声をあげる
機体の動きによるGと恐怖に耐える彼を背に、メインコンソールに指を走らせて、足の間から大きく伸びる操縦桿を莢は握りしめた

彼女の身体の一部のように動く機体は、右へ左へ傾けながら、寸前で黒い球体の波状攻撃を躲していく

彼女のいう通り、急激な機体の旋回により歯を噛み締めていないと舌を噛み切る恐れがある

それほど、身体中に遠心力が作用し透也はまともに目を開けられなかった

機体の起動音

空気を裂く音

水柱が立つ波飛沫の音

莢のリズムの速い呼吸音

生と死を賭けた戦いは、こんなにも静かなものなのか

このまま目をつぶっていたらいつの間にか死んで、次に目を開いたら異世界とかではなくただの死後の世界だったりするのではないか…

そんな考えが頭を過ぎると怖くなって、遠心力に耐えながら目を開いた

小さな背中の中、可憐な少女がその雰囲気似つかわしくないほど、勇ましい眼差しで戦っていた

怖くないのか？

どこに、そんな勇気があるのか？

一体、何者なんだ？

そして…

- - 俺は何をしているんだ？

彼女の背に隠れて守られている自分がひどく惨めに感じた

何も知らない

何もできない

こんなことが、こんなにも惨めで辛いものだと思透也は初めて知った

透也はそつと手を伸ばす

彼女が握りしめる操縦桿の上から優しく包むように握りしめた

「…っ！

変な気を起こしてる場合じゃ…ないっ…んですけど！」

英は黒い球体を避けるため面舵いっぱい操縦桿を傾ける
透也もそれに合わせて、手を添える

「一緒に戦わせてくれ。」

透也の声は静かにコクピットに響き

英は、何秒か考えて無言の頷きを返答として返す

優しく添えていた手を強く握りしめ直したその瞬間だった

視界が揺れる

心地好い耳鳴り…それはむしろ耳鳴りという表現すら許しがたいほどの天使の歌声が耳に響く

「レイゼファーが…喜んでる?!…貴方を歓迎するみたいよ。」

戦闘機を擬人化させる考えについては、些か問題があるだろうけども透也自身も、レイゼファーと呼ばれる戦闘機が喜んでるいる様に見えるし、それが嬉しかった

「行くぞ、レイゼファー。アイツをたたきのめすぞ。」

透也と莢とレイゼファーの反撃の狼煙が今立ち上った

「…急激にエーテル量が蓄積されている！…凄いよ！レイゼファー！」

莢は少女の様に喜んでいた

透也にすれば何が一体どうなってるのか、理解が出来ていないが（それは今に始まったことではないけど）

「『エーテルノヴァ』を使うわ！！」

莢は、ピアノを弾くようにタッチキーをリズム良く打ち込むと、画面に照準が表示されたディスプレイが二人の身体を包んだ

「なんだそれは？」

「レイゼファーに搭載されているレールガンから射出された弾丸を、エーテル粒子反応で加速強化させるの。」

「所謂、必殺技ってやつだな？」

「貴方、的を得るのが得意みたいね。」

俺にそんな得意技はもともなかった
この非現実的な状況を生き抜く為にいつの間にか、身につけてしま
つたらしい

「しかし、まだ黒い巨人の姿は見えないぞ。」

さっきから海中で禍禍しい圧縮重力を撃ち放つだけで
いっこうに敵自体を確認できていなかった

敵の居場所が分からなければ、エーテルノヴァとかいう凄い強力そ
うな必殺技も意味がない

「大丈夫。」

圧縮重力砲と交錯させるように撃つてしまえば、こっちの勝ち。
光速度に加速された弾丸は、発射されると同時に着弾するから。」

そんなに凄い攻撃手段があるなら、何で最後まで隠していたのだろ
うか…

そんなことを考えているとある思いが、透也の胸を襲い

「あつ…!!」

と声にならない声を発した。

透也は、敵を倒すことに夢中ですから『本来の目的』を忘れていることに気付いた

「ちょ…ちょっと！待ってくれ！達也…俺の姪っ子がまだあの巨人の中にいてるかもしれない!!」

その必殺技で達也もろとも消えてしまつては、本末転倒である

焦りながら透也は、彼女の手を握りしめて制止させる

「『アレ』がただのロボットなら、エーテルノヴァで吹き飛ばどころか、完全に存在を消せるし、私はこんなにも苦労しないわ。」

海中にいるであろう、あの黒い巨人を睨めつけるように茨は静かに語りかける

「ヴァルファラもまた神に近い存在。

私は『倒す』なんて一言も口にしてないわ。エーテルノヴァを持つたとしても少しの間、無力化できるってところかな。」

とんでもない奴を相手にしている…

そんなことを思うと本当に達也を取り返すことができるのだろうか不安になる

でもやらなければならない

大事な人を守るために

「願って。

貴方が今から撃ち放つ弾は希望。

決して達也くんには当たらないし、必ずあのヴァルファラを止めれる。」

透也が操縦桿を握りしめ、グリップ部のトリガーに手をかける

英は、彼がそうしたようにその上から包み込むように手を添えた

二人が乗るレイゼファアは大きく高度を上昇させて大気圏の寸前に到着

バーニアの火が止まり、万有引力の法則に従い、機体は地上へと吸い寄せられ、機体の先端部を下方へ向けて、スピードを加速させていく

「いい？圧縮重力砲がこっちへきたら、照準を合わせるから、トウヤは引き金を引く。

後はレイゼファアが修正してくれるから。」

空気を切りながら、レイゼファアは高度を落としていく

景色のすべてがスローモーションに流れて、
ゆっくりと海上から黒い球体が吐き出された

「いけええー！！」

円と四角の照準が合わさり、ロックオンの文字が表示されると、透
也は操縦桿の引き金を引いた

機体の下腹部に備えられた、砲身が長く二つに別れるレールガンは、
まばゆいほどの閃光を放つと、瞬時に海を『焼いた』
実際に撃ち放たれた弾を目で確認はできなかったが

着弾したであろう場所には、円形に水が蒸発し海の底が露骨に見える

その中心部には、黒い魔神

ヴァルフアラが無傷で立ちはだかっていた

『焼かれた』場所を補うように、周りの海水が激しく波飛沫を上げ
ていき

円形のその場所は、段々と狭くなっていく

それに合わせるように、ヴァルフアラも空中へとゆっくりと飛翔する

翼もバーニアもないのに推進力はどこから得ているのか分からない

単に、漆黒の巨体が浮遊する

その姿だけで畏怖の念を透也は抱く

彼の常識や知識など、あまりにも眼前にいる存在の前では無意味だった

「帰せ！！達也を返してくれ！！」

レイゼファアのコクピットで、透也の言葉が^{こだま}飜する

その声はヴァルフアラのパイロットに届くはずないとわかっていたが、彼は叫ばずにいられなかった

ヴァルフアラの両手が胸の前で合掌される

強烈な耳鳴りと共に視界が、世界が揺れる

合掌された手の間から、稲妻を伴う黒い球体を作り出されていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5648m/>

異空戦記レイゼファー

2010年10月9日10時33分発行